

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	竹中 菜苗
論文題目	暗闇への探究 —循環する「闇」と「光」の心理臨床学的研究—		
(論文内容の要旨)			
<p>「暗闇」は一般的に否定的な意味を付与されて「光」と対置されることが多いが、本研究はそのような特定の意味付けにおいて「暗闇」を捉えるのではなく、暗闇それ自体がその本性としていかに存在し、その内側にどのような動きや論理を内在しているのかという観点から暗闇への探究を進めてゆくものである。</p> <p>まず、序章「暗闇へ」においては、「暗闇」と「光」をモチーフとする創造神話を取り上げながら暗闇を捉える筆者の視点を明確にした。</p> <p>第一章「暗闇はいかに問われるべきか—『私たちは暗闇をいかに体験するか』という問いは成立するか?」では、暗闇体験に関する調査研究から、暗闇が「私」と「他者」との間に絶え間なく生成するはずの「境界」を「飲み込む」動きを内在しているということが導かれた。それを踏まえ、暗闇の絵を描いた思春期女子の心理臨床事例を検討し、「闇」への没入が「光」への反転を引き起こす可能性が示唆されるとともに、それでもなお、暗闇の外側に「私」を確保し続けようとする傾向の強さが指摘された。</p> <p>第二章「暗闇の暴力と「『私』の喪失」—私たちは「私」を失い、暗闇へと参入することができるのだろうか?」では、「私」という瞬間的な体験を奪う「暗闇の暴力性」と暗闇による「『私』の略奪」、そして「暗闇への参入」という事態について検討が加えられる。調査を踏まえた検討からは「『私』の喪失」という体験が生じたとしてもそれは瞬間的なものに留まることが多く、連続的に生成を続ける行為の主体としての「私」を徹底的に奪い続けることの難しさが明らかにされ、日常的な「私」の連続性の強固さと、暗闇の世界との大きな隔たりが明確にされることになった。</p> <p>第三章「暗闇への参入—『静止する暗闇』としての自閉症」では「自閉症」に「暗闇」の世界を認める立場から、心理臨床実践の場面で自閉症児とともに暗闇へと融解するセラピスト(筆者)の視点で、そこで捉えられた暗闇の内側で展開する動きを描写することが試みられた。まずは自閉症が、その行動特徴から「静止する暗闇」として捉えることができることを論じ、その静止した暗闇に亀裂が入るときに着目して、「静止する暗闇」がみずからを創造し、維持する力の強さと、それを破ろうとする力との拮抗、さらに暗闇の静止状態を破る力は、静止する暗闇の深みへと沈み込んだ先に現われるものだということが考えられた。</p> <p>第四章「『静止する暗闇』と光の生成—ある高機能自閉症女児とのプレイセラピーから」でも自閉症を取り上げ、ある高機能自閉症女児と筆者のプレイセラピー過程を検討することによって、自閉症児とセラピストという二者間で暗闇が展開するダイナミズムを捉えることが試みられた。自閉症という「静止する暗闇」の内側で闇と光が交錯しながら、終わることなく常に最初の状態(暗闇)へと立ち還るという循環のプロセスが認められた。</p>			

(続紙 2)

第五章「暗闇の解放—『アモールとプシケー』の心理学的解釈」では、ここまでの章で得られた暗闇に内在するダイナミズムに関する知見を踏まえて、神話「アモールとプシケー」を暗闇の観点から心理学的に解釈することが試みられた。そこでは、暗闇と光がダイナミックに展開する動きが読み解かれた。

終章「暗闇の心理学」では、より包括的な視点から本研究全体を振り返り、第一章から第五章にかけて進められた探究が全体としていかに暗闇を捉え、認識する作業になっていたかということが検討された。

第一章から第二章にかけて、暗闇を知ろうとする意識が試みていたことは、光が暗闇を照らし出そうとしては拒まれ、その光への反省という形でみずからを照らしだし、再び新たな光で暗闇を照らし出そうとするという作業の繰り返しであり、それは同時にそこに参入すべき暗闇を次第に広げていった作業でもあったのだと考えられる。そして暗闇への参入が果たされた第三章から第四章、第五章にかけて次第に暗闇に生成する「光」への言及が増え、暗闇と光のダイナミズムが捉えられていったことは、光を拒むことによって参入する暗闇の世界が必然的に再び光へと至るということを示していると考えられる。このように、本研究は全体を通じて「暗闇」を近代的な自我や道徳観、倫理観から解放し、終わることなく循環する闇と光のダイナミズムを認識してゆく「暗闇の心理学」であったと言える。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(続紙 3)

(論文審査の結果の要旨)

暗闇は、一般的に否定的な意味を付与されて「光」と対置される事が多いが、本研究はそのような特定の意味付けにおいて「暗闇」を捉えるのではなく、暗闇それ自体がその本性としていかに存在し、その内側にどのような動きや論理を内在しているのかという観点から暗闇への探究を進めたものである。暗闇に対するこうしたアプローチは独自性に富んだものであり、きわめて臨床的であると考えられる。

本研究は、まず「暗闇」と「光」をモチーフとする創造神話を取り上げながら暗闇を捉える視点を明確にし、続く第一章において、暗闇体験に関する調査研究から、暗闇が「私」と「他者」との間に絶え間なく生成するはずの「境界」を「飲み込む」動きを内在しているということが明らかにされた。それを踏まえ、暗闇の絵を描いた思春期女子の心理臨床事例を検討し、「闇」への没入が「光」への反転を引き起こす可能性が示唆されるとともに、それでもなお、暗闇の外側に「私」を確保し続けようとする傾向の強さが指摘された。

第二章においては、「私」という瞬間的な体験を奪う「暗闇の暴力性」について検討が加えられた。調査を踏まえた検討からは「『私』の喪失」という体験が生じたとしてもそれは瞬間的なものに留まることが多く、連続的に生成を続ける行為主体としての「私」を徹底的に奪い続けることの難しさが明らかにされ、日常的な「私」の連続性の強固さと、暗闇の世界との大きな隔たりが明確にされた。これらの調査研究は、暗闇を「とらえよう」としてそれに拒否され、暗闇を照らす光への反省という形でみずからを照らし出し、再び新たな光で暗闇に迫ろうとする試みであった。暗闇という捉えがたいものに心理臨床学の領域から挑もうとした意気込みと学問的価値は評価しうるものだと考えられる。

第三章と第四章においては、暗闇を「とらえる」のではなく、暗闇への「参入」が必要なのだとの気づきから、暗闇のなかへ足を踏み入れる。つまり、心理臨床実践の場面で自閉症児とともに暗闇へと融解するセラピストの視点から、暗闇の内側で展開する動きを描写することが試みられたのである。このふたつの章は本論文の中核を成すものであり、心理臨床学的にきわめて注目すべき知見を提供している。まず第三章では自閉症が、その行動特徴から「静止する暗闇」として捉えることができることを論じ、その静止した暗闇に亀裂が入るときに着目した。第四章でも自閉症を取り上げ、ある高機能自閉症女兒とのプレイセラピー過程から、自閉症という「静止する暗闇」の内側で闇と光が交錯しながら、終わることなく常に最初の状態すなわち暗闇へと立ち還るといふ循環のプロセスが認められた。暗闇を対象化しとらえるのではなく、その中に「参入」し、そこで浮かび上がってくる「暗闇」を描写しようとする本研究のあり方は、心理臨床のもつ本質と深く結びつくものであり、自閉症に対する心理臨床にも一石を投じるものと言える。

第五章では、ここまでの章で得られた暗闇に内在するダイナミズムに関する知見を踏まえて、神話「アモールとプシケー」を暗闇の観点から心理学的に解釈することが試みられ、暗闇と光がダイナミックに展開する動きが読み解かれた。

(続紙 4)

本研究は、まさに「暗闇」を近代的な自我や道德観、倫理観から解放しようとする試みであり、終わることなく循環する闇と光のダイナミズムが、心理臨床実践の内側から明らかにされたものと考えられる。

試問においては、「暗闇への探究という試みは、果たして成功し得たのか」との問いが出され、言葉の定義についても質疑があった。また、第一章、第二章とそれ以下との章では、筆者のスタンスに大きな変化があり、第三章以降すでに「暗闇」という概念を保ち続けなくてはいけない必然性はあるのだろうか」との観点から、事例の考察についても議論がかわされた。本研究は、そのテーマに関してまだ道半ばのものと考えられるが、興味深くもきわめて捉えがたいテーマに対して、果敢に迫り一定の成果を上げたこと、とくに自閉症の事例に対してプロダクティブな視点を提示し得たことは評価しうるものであり、本論文の意義を損なうものではないと考えられた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成22年5月6日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降